埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

不登校という子どもの生き方に関する考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): truant, shut up relationship 作成者: 杉山, 雅宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1519

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

実践報告

不登校という子どもの生き方に関する考察

Consideration on way of life for truant children

杉　山　雅　宏
SUGIYAMA Masahiro

1. はじめに

文部科学省（2021）によると，小・中学校における不登校児童生徒数は196,127人（前年度（181,272人）であり，前年度から14,855人（8.2%）増加した。不登校児童生徒数が8年連続で増加，約55%の不登校児童生徒が90日以上欠席しているなど，憂慮すべき状況である。児童生徒の休養の必要性を明示した「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（以下，「教育機会確保法」とする）の趣旨が浸透したという側面も考えられるが，生活環境の変化により生活リズムが乱れやすい状況や，学校生活においてさまざまな制限がある中で交友関係を築くことなど，登校する意欲が湧きにくい状況にあったこと等も背景として考えられる。

2. 本稿の目的

不登校という現象が一向に減少しない現状をどうとらえたらよいだろうか。不登校は，社会的活動を回避し家庭にひきこもるという現象であることから，子どもを取り巻く環境の悪化を強調する観点がある一方で，社会的な場にとどまるこらえ性のない子どもの心性やそれを育む親機能の低下を中心に据える観点も存在し，両者が常にぶつかり合ってきたというのが，わが国の不登校論の特徴的な展開である。

筆者はこの両者どちらかに肩入れすることはしない。おそらく，不登校はこの時代の空気と日本人の心性を優れて象徴する現象であり，どの時代にもその時代心性を象徴的にあらわす特徴的な現象があったように，現在は不登校がそれなのではないかと考えている。

不登校に関与する子どもや若者の心性として，1つは友人関係あるいは仲間集団との関係に対する傷つきやすさ，あるいは過敏性の亢進があげられる。もう1つは，親子関係をめぐる世代間境界の曖昧さである。本稿でこれらの詳細を述べることはしないが，不登校におけるこころの状態は，ある親子の特殊な関係性ではなく，わが国の社会の到達点として多くの親子に内在しているのが現代という時代といえよう。

最近，子どもの家庭支援が学校に期待されつつあるが，それと関連して教師の保護者理解や支援の在り方も問われるようになった。不登校支援もそのカテゴリーに入ってくる。

学校臨床の現場で，子どもに接している教師1人ひとりが教育についての問いを発信することが少なくなってきていることを筆者は危惧している。こうした問いがあるからこそ，教育の新たな可能性とよさが見出される。そういう問いこそ，直に子どもにかかわっている教師1人ひとりから発せられることに意味があると思う。

本稿では，不登校という子どもの生き方を臨床心理学的にとらえ，教師がどのように不登校に対応したらいいのかという課題に向き合うために，今までの常識や通念を揺るがすような気づきを教師に促すことを目的とする。

尚，本稿で紹介している事例は個人の特定を避けるため，複数事例を組み合わせた創作事例であることをお断りしておく。

3. 長期的視点での不登校の推移

村山（2010）の報告によれば，1967年，当時

の文部省による学校基本調査に「学校ぎらい」という項目が初めて加わった。当時の出現率は，小学校で 0.04％，中学校で 0.2％程度である（ただし，病気や経済的理由以外の年間 50 日以上の欠席者）。前島（2019）は，戦後日本の中学校における長期欠席率は，1952 年以降右肩下がりに減少し，1975 年を境に右肩上がりに伸び，2000 年までは右肩上がりに増加していたことを報告している。

1950 年半ばころ，「とくに地方では子どもを働き手とみる家庭も多く，子どもが学校に行きたくても行かせてもらえない状況があった」（笠原，2021）。しかし，1980 年代に入ると，小・中学校の完全就学が達成され，子どもたちは学校に行くのが当たり前の時代になった。その当時から現在のいわゆる大学全入時代に至るまで，不登校は増加し続けている。「不眠症の歴史は人類の出現とともに始まり，集団生活化およびその規模の拡大と近代化とともに頻度は増加していった」（村崎，2018）が，公教育制度が確立される明治以前，あるいは子どもが学校に行かなくても周囲がそれでよしとしていた社会では不登校はあり得なかった。不登校は，時代や社会，文化の影響を帯びた現象であるともいえる。

大学がモラトリアムの時代とされたのも過去のことである。小学生から社会人に至るまで高い「コミュ力」と「キャラ」が求められ，キャリア教育が早期から開始される。SNS は隆盛を極め，プライベートのみならず，公的にも用いられている。内面に沈潜しづらい外向性偏重の社会において不登校が増えているという事実は，私たちの時代を映す鏡のようである。極言するなら，外向的社会を生きる現代人はみな，多かれ少なかれ，不登校やひきこもり願望を無意識に抱えているとさえいえるだろう。

4. 多面的な不登校の要因・背景

不登校という現象に影響するさまざまな要因・背景についいてみていく。

(1)　子ども自身の個人的要因

子ども自身の個人的要因として無気力，怠学，優等生の息切れ，非行等による学業不振などが挙げられる。現代ならではの問題として，その背後にネット依存やゲーム依存などが存在する場合がある。ただし，これは個人的要因というより，SNS によって友だちと常時つながっていなければならないという不安に駆られている場合もあり，いじめ問題とともに対人関係面での注意も必要であろう。単純に個人的要因といっても，家庭環境や学校社会との関連も見逃せないし，強迫性障害や統合失調症などの精神疾患，あるいは発達障害をベースにした認知特性の偏りやコミュニケーションの困難が背景にある可能性もあり，配慮を要する。学業にエネルギーが向かずに不登校状態ではあるがテストだけはよくできるなど，学業不振と学力あるいは知的能力が必ずしも一致しないケースもある。

従来の不登校理論では，たとえば精神疾患の二次障害としての不登校，あるいは怠学・非行，原因不明の場合をわけるなど，主として個人的要因をもとにタイプわけがなされてきた。また，小林（2002）は，欲求不満耐性と社会性という二つの軸を用い不登校を分類している。つまり「耐性も社会性も低い不登校児と，どちらも高い不登校児がいて，前者は心を育てるべく信頼関係を築きながら根気強くかかわり，後者は進路適応を図るなど，それぞれ異なった対応が必要である」という有益な指摘がなされている。

(2)　家庭や養育環境の要因

不登校研究の出発点から，母子の依存や過保護が問題視されてきた一方で，母子の情緒的結合の弱さが背景にあるとする逆の指摘もあった。深層心理学の観点からみれば，それは表裏一体で，深い情緒的結合がないからこそ表面的には密着せざるを得ないとも考えられる。同様に，母子の強い密着の背景に夫婦間の葛藤があったり，ひとり親であるために子どもとの適度な心理的距離がとりづらくなったりすることもある。いつまでも友人関係のような母親との親密さが続き，分離・独立をめぐる反抗が表立って現れない思春期の子どもが珍しくない。

親に精神疾患がある場合や，虐待や家庭内暴力などが絡んでいる場合には緊急の対応が必要になるため，専門的なアセスメントが必要になる。親子関係の問題は，実のところ親世代，あるいはもっと上の世代の課題を背負わざるを得ない子ど

もに学校社会の激流を泳いでいく余力が残されていないのは当然であろう。家族心理の複雑な力動をみると，不登校という現象が単純な要因によって成り立っていないということがよくわかる。

(3) 学校システムとそこでの人間関係

集団での教育は，個性を大切にしても，落ちこぼれや浮きこぼれを完全に避けることは困難である。加えて，前思春期から思春期の子どもたちは，凝集性の強い排他的な集まりであるギャング集団や，同質性の強い親友集団であるチャムシップを形成する。それは親や家庭からの心理的な自立を果たすうえで大きな意義をもっている。同時に，理由もなく誰かを排除することによって仲間意識や同質性が確認されることもある。中学生で不登校が増加する背景には，こうした子どもたちの心理社会的な発達に伴う影の側面があるといえよう。

かつて仲間集団から離れることは大きな葛藤と喪失感を伴い，不登校に踏み切るとき，その挫折感は何ものにも替えがたいほど大きなものであった。しかし，現代の子どもたちの友人関係はどこか表面的であるようにみえる。仲間に入れ込んでいるようでも，些細なすれ違いでたちまち仲間との関係をあきらめ，攻撃的になったり，家庭にひきこもったりする。これは同年代仲間集団における関係性の危機を切り抜ける能力の衰弱のように感じられてならない。

(4) 子どもたちを取り囲む文化の問題

これは，子どもたちを取り囲む同心円の一番外側，また一番深いところの問題である。日本文化を理解するキーワードとして，ルース・ベネティクトの「恥」，土居健郎の「甘え」，阿部勤也の「世間」，河合隼雄の「母性社会」など，さまざまな視点が提供されており，それぞれが不登校問題と深く関連している。こうした観点も加えてみると，1人ひとりの不登校の子どもが向き合っている困難が，大げさにいえば日本人全体が抱える課題とも無縁ではないことに気づかされるのではないだろうか。子どもたちの苦悩は，私たち大人の苦悩の縮図ともいえる。

5. 原因論から目的論

不登校とは，幅広い要因を背景にした複雑で多様な現象である。ゆえに1人ひとりの子どもを，それを取り巻く家族や学校の様子を，細やかにみていく必要がある。そのとき，発達障害やいじめ，家庭内暴力などの問題を見逃さないことなど，学校・教育関係者が連携をとり不登校の背景や要因をできる限り深く理解しようと努力することは肝要である。

河合（1999）は不登校について，「親や教師がその原因を知ろうと焦ると，短絡的な不安に支配され，いわゆる“悪者探し”をすることになる。“子どもが怠けているだけだ”，“父親が弱い”，“母親の過保護”，“学校教育が画一的すぎる”など，どれも一理あるが，それだけを原因と決めつけてしまっては，次にどうしていいのかわからない。結局これらの“悪者探し”は，親や教師が“自分は悪くない”と考えるための免罪符として使われるだけになってしまう。そのように短絡的に考えるのではなく，不登校という現象をじっくり受け止めて，過去にその原因を探るよりは，このことによって未来はどのようなことが起ころうとしているのか，これを契機にどのような可能性が開かれるのだろうか，と考える態度もある」と述べていることは注目に値する。

一般的に，就学は先の進路，そして社会的自立へとつながると考えられているため，不登校は社会適応の阻害を連想させる。したがって，未来に対する漠然とした不安によって“学校には必ず行かなくてはならない”という強迫観念が生じうる。

子どもに9年間の義務教育を受けさせることは学校教育法に規定された保護者の義務である。しかし，文部科学省（2017）では，不登校児童について「個の状況に応じた必要な支援を行うことが必要であり，登校という結果のみを目標にするのではなく，児童や保護者の意思を十分に尊重しつつ，児童自らの進路を主体的に捉えて，社会的に自立することを目指す必要がある」と明記している。すなわち，子どもの未来を考えるうえで，不登校を契機として何ができるのか，どんな道が開かれるのかという目的論的な観点をもつことも重要な視点である。

かつて，学校に行けない子どもの選択肢は登校

するか否か，白か黒かであった。しかし，現在では不登校の受け皿は充実している。学校内では保健室，別室登校，特別支援学級などがあり，担任のみならず養護教諭やスクールカウンセラーなども対応してくれる。学校外では適応指導教室やフリースクールなど，登校・不登校のどちらでもないような中間的な選択肢が増えている。たしかに不登校は放置されればひきこもりへと展開しやすいのも事実だ。しかし，こうした多様で中間的な受け皿が増えることで，個別の子どもの状況やニーズに合わせた教育の形が期待できる。

子どもたちが元気に学校に通うことを願うのは当然である。教育は子どもたちを未来の社会へ送り出すための大切な役割をもっている。しかし，学校に通うことのみならず，学校へ行けないことにも意義を見出せることは，不登校の子どもたちとその保護者にとって大きな支えになるはずだ。

6. 不登校への対応についての考察

(1)「こもる」とはどういう意味か

不登校の子どもへの安易な登校刺激が害になることは最近常識となってきた。本人が一番苦しく不安で傷ついた状態であるから，そこに外部からの刺激を入れることには慎重になるべきである。「学校に行くことが嫌でなくなればよい」という見解もあるが，学校は楽しいのに具合が悪くなって行けないという子どもたちがいるのも現実である。

河合（1992）は，「幼虫が蝶になるまでに“さなぎ”になる必要があるように，子どもが大人になるためには人間もある程度“こもる”時期が必要だ」と指摘している。「こもる」ことが積極的かつ肯定的な意味をもつという。同様に，増井（2002）や齋藤（2014）によれば，不登校であることを家族が受容・保証したうえで，挨拶や会話などを通じて，家族間でほどよい距離がとれるようになることなどが重要との指摘がある。つまり，不登校対応の第一の要点は「安心してこもれる環境づくり」ということである。

では，「こもる」ことにどのような意味があるのか，いくつかの側面から考察する。

1)　守られるという意味

「こもる」ことは守られることに他ならない。さなぎのなかでは，幼虫としての体がいったん溶解する。子どもとしての自分が死に，大人へと変化しつつあるとき，守られることはとても大切になる。古典的な不登校のタイプの 1 つとされる優等生の息切れは，疲れ切った心身のエネルギー補給を必要とする。抑うつ状態に対する治療の第一選択が休養であるのと同じである。教育機会確保法第 13 条では，「個々の不登校児童生徒の休養の必要性を踏まえ，当該不登校児童生徒の状況に応じた学習活動が行われること」の重要性が指摘されている。さらに，新学習指導要領では，いじめに対する緊急避難として欠席が認められてもよいと明記されている。いじめにより自殺に追い込まれるよりは，学校を休む方がどれほどよい選択であろうか。

2)　時期を待つという意味

不登校はひきこもりにもつながりやすく，社会的自立のプロセスをいったんドロップアウトすることと思われがちである。

岡田麿里は，長い不登校の時期を経て，脚本家になり，自分自身の体験をモデルにした『あの日見た花の名前を僕たちは知らない』，『心が叫びたがっているんだ』などの人気作を生み出した。彼女は適切な時期に人の縁に恵まれて才能が開花したわけではないが，それはまるで時と人を待っていた「眠り姫のようなものである」（岡田，2017）と自身を評価する。

この点に関し，筆者が対応した事例を紹介する。

母親が重い病気のため入院・手術をすることになったが，父親や他の家族は多忙のため看病ができなかった。そこで立ち上がったのが，長く不登校であった長男 A（高校 3 年生）であった。A はほとんどしない外出をして必要な買い物を済ませ，病院で母親の世話をしたばかりか，友だちとの会話もしないのに医師や看護師との事務的なやり取りを引き受けた。筆者からすると「A がずっと家にこもっていたのは，このためだったのか」と思うばかりで，まさに A の働きが家族の危機を救ったのだった。

内的成熟には外側からは見えにくい時間が必要なのかもしれないということに筆者は気づかされた。

3)　夢見ること

古来，ギリシャや古代ローマ，日本でも行われ

ていた「参籠」と呼ばれる儀式がある。人々は聖なる場所にこもり，夢などを通じて神託を得る。不登校も同様に，「こもる」ことにより自分の何かを発見するケースがある。タレントの中川翔子は，いじめを原因とする不登校経験を公表しているが，家にこもってずっと見ていたのがアニメだった。彼女は「苦しい時期に自分自身が生きる支えとなったアニメを深く愛し，これからも愛し続けるつもりだ」（中川，2019）と語っている。彼女は，映画『塔の上のラプンツェル』をはじめとする声優，アニメソング歌手，ラジオパーソナリティとして，生き生きとアニメの仕事に関わっている。

ただし，筆者のカウンセラーとしての経験からすると，不登校の子どもの日常は近時大きく変容しているように思う。かつては自室でアニメや漫画を見る，音楽や読書，プラモデルなど自分の好きなことをして多くの時間をひとりで過ごし，孤独だからこそ自身の内的世界を深く探索することも可能となった。しかし，現在では，動画を見たり，SNS で見知らぬ人とつながったりする不登校児も増加している。外出しなくても社会とつながることができる。その一方で，心理的にしっかりと自分の内側に「こもる」ことができにくい状況にあることも否めない。

(2) 他者の存在について

「こもる」ことは容易なことではなく，痛みや苦しみを伴うし，長期化する危険性もある。したがって不登校が意味ある目的へとつながるためには，粘り強く関わってくれる他者との対話が大切である。家族ではこの他者性が薄まるため，できれば第三者，それも自己のあり方を尊重してくれる存在が望ましい。カウンセラーはそれに適しているが，教師はどうしても存在そのものが登校刺激になるので，留意する必要がある。

ここで，「こもる」ときの異世界の体験および他者の存在意義が明確に描かれている作品を２つ示す。

1) 思い出のマーニー

スタジオジブリにより映画化された『思い出のマーニー』では，家族にも友人にもかたくなに心を閉ざしたアンナが，転地療養先で不思議な少女マーニーに出会う。アンナもまた異世界に迷い込む不登校児である。異世界での体験とマーニーとの絆により，アンナは自分が生まれたこと，生きていることの意味を取り戻していく。

2) バケモノの子

細田守監督によるアニメーション映画『バケモノの子』では，ひとり親家庭で育った９歳の少年（人間界の渋谷で生きる蓮，またの名を九太）が，母親を亡くしたことをきっかけに家を飛び出す。そして，ふとしたきっかけからバケモノ（熊のような大男，バケモノ界である渋天街を生きる熊獣人の熊徹）と一緒に暮らすことになり，九太という名前をもらう。ふたりは毎日喧嘩しながら異世界で刀の稽古を続ける。バケモノが師匠，九太は弟子なのだが，お互い悪口を言い合いながら喧嘩ばかりする。ふたりの関係は極めて対等で，たいへん素晴らしい。九太は現実の学校に通ってないので不登校であるが，８年もの月日を経て彼は大きく成長し，再び現実世界へと戻り，自分自身が抱えている傷や闇に向き合っていく。

どちらの作品も，現実を生きることが難しい少年少女が，異世界で重要な人物と出会い，その体験を頼りにして現実世界を生きることができるようになる物語である。そこで描かれている彼らの傷や闇は，九太やアンナだけのものではなく，人間一般に通じる普遍的なものだといえる。

文部科学省（2016）は，不登校児童生徒への支援のあり方を示している。そこでは，不登校が多様な要因・背景の結果としてどの児童生徒にも起こりうること，したがってその行為を「問題行動」と判断してはならないこと，しかし十分な支援が得られない状況が継続することは本人の進路や社会的支援のために望ましいことではないため，学校・教育関係者が充実した指導や家庭への働きかけを行うとともに関係機関との連携協力による支援を図ること，などの観点が提示されている。

指先や声により一瞬スマートフォンを操作することで用事が済んでしまう現代，私たちは小手先で物事を操作することに慣れている。しかし，子育てや教育など，人間相手の営みは思い通りにはいかない。人間が本当の意味で育っていく，真に変わっていくには時間と人手が必要になる。変化がみえない時期もある。人と人とが手を取り合い，時間をかけ丁寧にかかわることが求められる。植物を育てるように，日々水をやり続け，陽

の光に感謝して春の訪れを待つというイメージを持つ方がよいかもしれない。

7. おわりに

古事記の「天岩戸神話」によると，天岩戸にこもった天照が外に出てきたのは，外側から引っ張り出されたからではなく，天鈿女命の踊りとみんなの笑い声に彼女自身が興味を持ったからであった。他者はあくまでもきっかけにすぎず，内側からの意思によって歩み出すことの意味は大きいといえよう。

学校とは将来のために今を努力することが求められる場であるし，子どもとは大人になるまでの辛抱をいろいろ重ねなければならない存在である。それを通して大人になっていくわけであるが，しかし，今の幸せ感がないまま将来の幸せをイメージしたり，その将来に向かって今を努力することは難しいだろう。逆に，将来への見通しが真っ暗なまま，今に幸せ感を抱くことも不可能であろう。不登校の子どもにとって，学校内で得られなかった生き生きとした体験を，その場で得るところに大きな意味が見出せる体験こそがまさに不登校である。その体験が得られるかどうかがすべてにかかっているような気がしてならない。

本稿は，令和 3 年 8 月に実施した川口市教育委員会主催「教頭マネジメント研修」での講演内容に大幅な加筆・修正を加えたものである。

引用文献

文部科学省　2021 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」
村山正治　2010 「スクールカウンセラー事業の実態と課題：データとともに見る」 教育と医学 58 (5) 430-437
前島康男　2019 「新自由社会と登校拒否・ひきこもり問題：その歴史・理論と解決の道筋」 東京電機大学総合文化研究　17 号　3-11
村崎光邦　2018 「睡眠薬開発の歴史」 精神医学 60 (9)　935-947
笠原良太　2021 「なぜヤマの子どもは炭鉱マンになったのか ── 鉱業学校の展開と世代間継承 ──」 家族社会学研究　33(2)　204-211
小林正幸　2002 『先生のための不登校の予防と再登校援助』ほんの森出版　45-60
河合隼雄　1999 『不登校』金剛出版　3-4
文部科学省　2017 「平成 29・30・31 年改正学習指導要領」
河合隼雄　1992 『子どもと学校』 岩波新書　25-29
増井武士　2002 『不登校児から見た世界』有斐閣選書　18-28
斎藤　環　2014 『ひきこもり救出マニュアル〈実践編〉』 ちくま書房
岡田麿里　2017 『学校に行けなかった私が「あの花」「ここさけ」を書くまで』 文藝春秋　36-37
中川翔子　2019 『死ぬんじゃねーぞ‼』 文藝春秋 28
文部科学省　2016 「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」